

映像だが、言葉で表現するとなるとむづかしい。名詞を多くし、動詞を一つにしぼった工夫に注目する。

エアコンは消さない家の真ん中でクロワツサンの形に眠る
月丘ナイル

眠っているのは何だろう。人間はクロワツサンのような形になれない。すぐ前に猫の歌があるので、眠っているのは猫だろうと読んだ。こういう形で主語が省かれてる歌も、連作の一首として読みが可能になっていればOKである。

光線を抱いて回転する人のその恍惚を捉へる恍惚

松本実穂

ダンサーを写真に撮る一連中の一首。日舞やハワイアンドンダンスではなさそうで、モダンダンスか古典バレエらしい。どうやらレンズが追っているのは一人のようだが、男性か女性かは分からない。場面の描写を断念し、「恍惚」を二度使って一人称の内部に絞って特色を出した。

大根は剥いても切ってもただ白い色の重たさ手に量りおろし
朝倉恵子

太くて長い冬の大根の豊かさを、「色の重たさ」と表現した手柄。なんとなくユーモアの味も感じられてうれし。

六万羽の雁うけとめる沼というわれもともに夕闇つつむ
小林優子

上句、沼を主語として「雁うけとめる」としたところが新鮮である。下句では「夕闇」が主語になっている。北海道の美幌市の宮島沼は、六万羽ものマガンがやって

くる沼として有名。

華やかなでもシンプルで目立たない春色のシャツ探す冬の日
細溝洋子

やってくる春の理想の自分がえがかれていて興味深い。華やかだけれど目立たない、というのは矛盾するようだが、なんとなく分かる気もする。

吹く風がわずかに乱れたまだ過ぎる広野の中のとわれと
いう場所
武藤義哉

自分と社会との関係を、たんたんとしかも抽象的に表現した一首。何度か読み返すと、「吹く風がわずかに乱れたまだ過ぎる」の部分、自分の立場の変化や揺らぎ、あるいは環境が好転したり乱れたり、と各自が思い当たるところがあるだろう。工夫された一首と読む。

棟方の黒と茶色の菩薩図の円き身体に流るる衣

栗原道子

下句「……円き身体に流るる衣」が的確な表現で、読者に立体感を感じさせる。棟方志功の菩薩図はたくさんあるのでどれとは分からないので、読者は勝手に菩薩像を思い浮かべる。この作の読みにはそれで充分だろう。

生け花の素材の麦の穂のゆれがゆらゆら昭和を連れ戻しくる
水本光

生け花の一つとして活けられた麦の穂。下句、昭和を知っている年代の者には、麦の穂が、なんとなく懐かしい感じを呼び起こす。私も例外ではなく、子供時代に麦踏みを経験し、麦の穂に触れたりしながら、学校へ通った思い出もある。